

2019.4
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま
富 薬

4号

第41巻
No.357



ホンシャクナゲ *Rhododendron japonheptamerum* Kitam. var. *hondoense* Kitam. (ツツジ科 Ericaceae)

- 生 薬** セキナンヨウ（石南葉） 夏に葉を採取し、水洗しながら裏面の毛をたわしでこすり落とし、陽乾する。
- 成 分** 有毒成分：rhodotoxin、その他：rhododendrin, ursolic acid, oleanolic acid、tannin 等。
- 効 能** 利尿薬として浮腫やリウマチ、痛風に用いる。有毒なので注意する。

生薬 セキナンヨウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



シャクナゲは園芸で使われる呼び名で、植物学的な分類ではありません。ツツジ属 (*Rhododendron*) のうちのシャクナゲ亜属 (*Hymenanthes* 常緑で無鱗片) の原種やそれらのハイブリッドで枝先に花が房状に多数集まって咲くものと呼んでいます。日本の原種を元にした園芸種をニホンシャクナゲ、欧米で育成された園芸種をセイヨウシャクナゲと分けて呼ぶこともあります。シャクナゲ亜属は世界に約270種、主にアジア、ヨーロッパ、北アメリカに分布し、特にヒマラヤ東部、ネパール、中国雲南省、四川省に多くが分布しています。日本には北方系で本州中部の高山や北海道、朝鮮半島、シベリア東部、千島列島、サハリン、カムチャッカ半島に分布するキバナシャクナゲ (*R. aureum*)、四国石鎚山、本州中部以北の亜高山帯、朝鮮半島北部に分布するハクサンシャクナゲ (*R. brachycarpum*) の2種と南方系の屋久島固有種のヤクシマシャクナゲ (*R. yakushimanum*)、本州中部地方以西や九州、四国に分布するツクシシャクナゲ (*R. japonoheptamerum*)、東北南部や関東地方に自生するアズマシャクナゲ (*R. degronianum*)、静岡県、愛知県に自生するエンシユウシャクナゲ (*R. makinoi*) の4種、計6種とそれらの変種が自生しています。

ホンシャクナゲはツクシシャクナゲの一変種で本州中部地方以西や四国に分布し、溪谷の酸性土壌を好んで生育します。滋賀県日野町鎌掛谷の群生地が有名で、国の天然記念物に指定されています。高さ5-6m、幹径30cmにもなる古木もあります。葉は互生し、革質で全縁、表面は無毛で光沢があり、裏面は密生した毛が一面にあって淡褐色。花は4-5月に枝先に総状花序をだし、多くの花を咲かせます。花冠は紅紫色から白色、漏斗状で、7裂します。雄ずいは14個、花冠より短く、花柱は雄ずいより長く、花冠よりぬき出ないで上に曲がります。果実は円柱形です。

現在、中国産の石南葉はバラ科のオオカナメモチ (*Photinia serrulata*) を乾燥したもので、日本とは異なった植物に由来します。『図経本草』(1062)や『本草衍義』(1119)に記載されている「石南葉」はともにオオカナメモチを示唆していますし、『神農本草経』や『名医別録』(502-536)の効能もシャクナゲとは違っていることから、別植物と考えられます。

日本の古書でシャクナゲの名が出てくるのは室町時代の国語辞典『下学集』(1444)で「石南花」とあり、江戸時代初期の本草書『多識編』(1612)に「石南、土比良乃岐、又云う土扁良、今俗に云う志也久奈計」と、低木または小高木で葉身が長楕円形、革質という比較的似た形態を持つトベラ (*Pittosporum tobira*) の名を与えながら、シャクナゲの名も充てています。当時の園芸書『花譜』(1694)には「石南花、葉はとべらの葉、あるひは山もも (*Myrica rubra*) の葉に似て、大なり。花は芍薬に似て、小なり。其色うす紅にして、みるにたえたり」とあり、トベラに似た葉であることや園芸植物として認める表現があります。『本草綱目啓蒙』(1803)には「シャクナン (石南の呉音)、シャクナゲ (石南花の呉音)、シャクナンゾウ (古書にシャクナン草の名あり)」、続いて「深山幽谷に生ず。高さ六七尺、叢生す。葉は石草 (*Pyrrosia lingua*) の葉に似て厚く、末広く、本狭く、面深緑色、背に褐毛あり。冬を経て枯れず。枝梢ごとに簇りて互生す。四月其上に花あり。形躑躅の花に似て大なり。五弁より七八弁に至り。齋しからず、淡紫色。凡そ数十花簇り開く。遠望すれば淡紫牡丹花の如し」と詳細にシャクナゲの特徴を書き表しています。(村上守一 記)